

文観房弘真の付法について（上）

内 田 啓 一

はじめに

文観房弘真については筆者は以前、『南都佛教』第七十八号の拙論の中で、大谷大学図書館蔵本『瑜伽伝灯鈔』を用いて、「文観房弘真とその関係略年譜」を制作し、その生涯を概観したことがある。⁽¹⁾そして弘真の付法については注13の中で本文通りに列挙し、尾道・浄土寺との関係のなかで付法者の名前が見いだせることを指摘した。

本稿では改めて浄土寺関係の史料の中から付法者と思われる名前を取り上げ、西大寺末寺としての浄土寺を示し、次に西大寺やその他の律僧の中、そして東密関係の中に付法と思われる僧の名前を指摘しておきたい。それによって文観房弘真の事跡⁽²⁾や前後関係が多少なりとも明らかになれば幸いである。⁽³⁾

しかし、『瑜伽伝灯鈔』⁽⁴⁾そのものに対する史料批判や付法者の信憑性の問題もある。また、本稿では現時点で判明した僧名であるが、これが何々房といった仮名なのか、諱なのか、字なのか、本名なのかも判然としていない。しかし、諸史料のなかで、同一と判断されるもの、また、同一とみなしても不自然ではないものを見出すことにした。現時点で不明であつても、今後判明する者も増えること、また、本稿で挙げた付法者が同名であつて別人である場合もあることを考慮しての稿であることをお断りしておく。全て確実に付法者に対して比定をすることが当然であるが、あえて今後の提起として本稿を記しておきたい。

一 付法者概観

まず、『瑜伽伝灯鈔』にみえる文観房弘真の付法は次の通りである(図1)。なお、ここでは便宜上番号を付した。

- 1 太夫阿闍梨信慶 2 最初伝僧正道 3 二品親王
- 4 憲什 5 僧正実助 6 憲家 7 最順 8 賢
- 俊僧正 9 宝池院 10 後三宝院 11 僧正隆誉
- 12 聖基 13 僧正成助 14 僧正道禅 15 潤恵
- 16 僧正了賢 17 俊性 18 祐甚 19 顕恵
- 20 道忠 21 無品親王聖尊 22 祐円 23 西南院
- 宮僧正 24 道世 25 忠禅 26 有順 27 祐性
- 28 厳性 29 深賢 30 了円 31 奥禅 32 定誓
- 33 浄心 34 顕性 35 顕永 36 明範 37 善空
- 38 恵林 39 厳基 40 了胤 41 尊忍 42 宣照
- 43 隆賢 44 教遍 45 尊観 46 宴海 47 戒忍
- 48 道性 49 行空 50 性印 51 妙円 52 観海
- 53 本空 54 定泉 55 聖運 56 戒妙 57 隆恵
- 58 澄助 59 智宝 60 無如 61 本空 62 良地
- 63 行照 64 長暹 65 仏衆 66 円遍 67 深誉
- 68 照念 69 宗遍 70 道遍 71 慶意 72 道暁

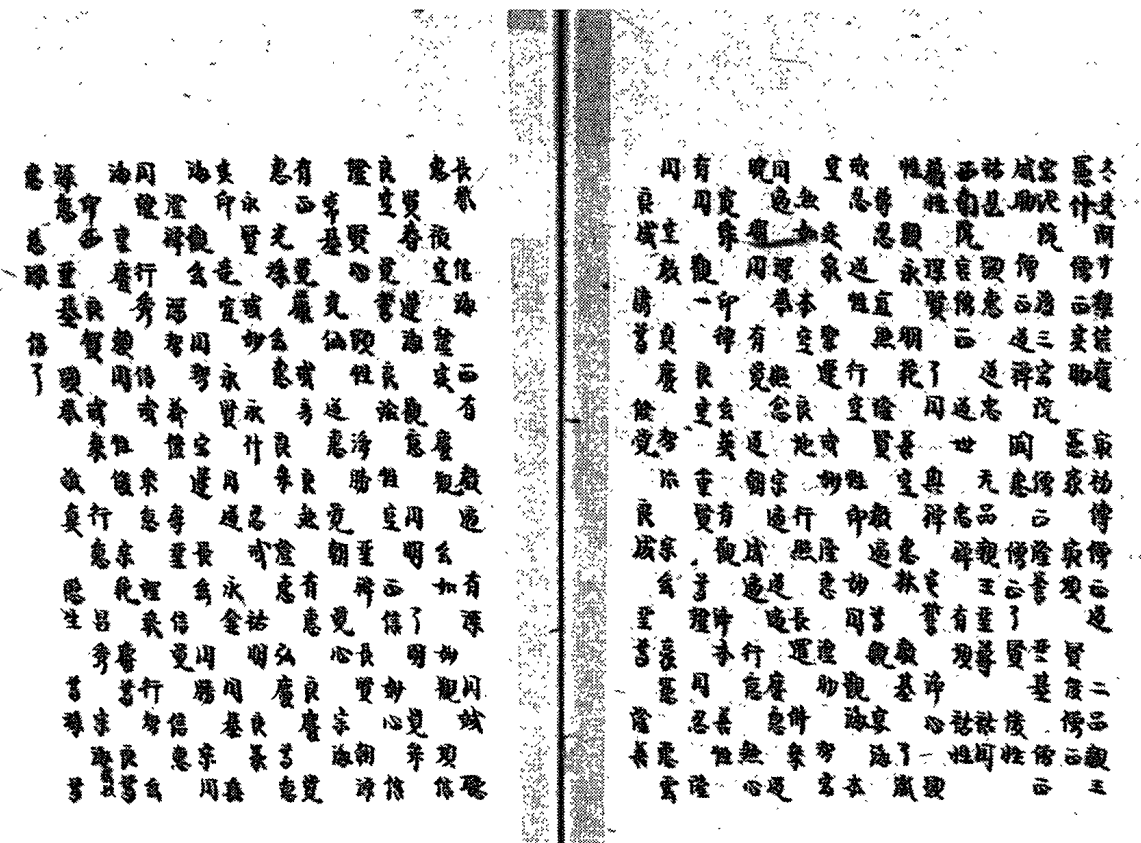


図1

168	163	158	153	148	143	138	133	128	123	118	113	108	103	98	93	88	83	78	73
観玄	永賢	忍戒	弘慶	覚「恵	覚嚴	道恵	聖禪	妙心	良空	蓮海	慶観	有深	隆善「	良成	真慶	重賢	浄本	然「心	明円
169	164	159	154	149	144	139	134	129	124	119	114	109	104	99	94	89	84	79	74
円智	円道	祐明	尊意「	光殊	戒音	覚朝	長賢	信「証	覚誓	観意	玄如	円誠	長誉	清尊	智治	尊証	善性「	寛舜	有覚
170	165	160	155	150	145	140	135	130	125	120	115	110	105	100	95	90	85	80	75
宝蓮	永金	良承「	永賢	玄恵	良然	覚心	朝源「	賢心	良瑜	円明	妙観	聡「恵	信海	修覚	宗玄	円忍	有円	印律	道朝
171	166	161	156	151	146	141	136	131	126	121	116	111	106	101	96	91	86	81	76
長玄	円基	実印	戒妙	良弁	有恵	宗海「	常基	顕性	性空	了明	順信「	禎空	正有	良成	豪憲	隆「円	観一	玄英	成遍
172	167	162	157	152	147	142	137	132	127	122	117	112	107	102	97	92	87	82	77
円勝	真「海	龍宣	永什	証恵	良慶	有正	光仙	浄勝	正信	覚弁「	賢春	証実	教遍	聖尊	恵雲「	空教	良空	有観	行意

173	宗円「	174	澄禪	175	深智	176	義俊	177	専聖
178	信覚	179	信恵「	180	円証	181	行秀	182	信戒
183	乗意	184	理乗	185	行智	186	玄「海	187	重慶
188	頼円	189	性俊	190	宗範	191	慶尊	192	良尊「
193	印西	194	良賀	195	戒乗	196	行意	197	昌秀
198	宗海戒歟「	199	源意	200	聖基	201	顕誉	202	
敬真	203	愍生	204	尊珠	205	尊「恵	206	慈源	207
信了									

と全部で二〇七人の付法を数える⁽⁶⁾。付法数としては、例えば、『血脈類集記』⁽⁷⁾第十に記される報恩院流の憲深権僧都で「付法三十人」とあり、第十一の法印権大僧都忠遍で「付法七十人」である。概して平安時代から鎌倉時代初期にかけての付法者数にくらべると、時代が下がるにつれ付法者数は増えるようである。ちなみに醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』⁽⁸⁾の権僧正憲深では「付法五十六人」であり、『血脈類集記』よりも多い。いずれにしても二百余人の付法数はやや多い感がある。なお、『瑜伽伝灯鈔』の書写者である宝蓮は一七〇番目である⁽⁹⁾。

付法の最初には阿闍梨、僧正などが掲出されており、後に触れるが、醍醐寺や東寺などの僧侶が多く、途中から比

丘僧など歴史に名を留めない僧名が増えてくる。また、53本空と61本空、141宗海と198宗海と二人の名を見る場合がある。

二 尾道・浄土寺関係

まず最初に尾道・浄土寺関係に見られる付法である。浄土寺は永仁六年（一二九八）六月に叡尊の付法である定証が村老らの求めで浄土寺に入寺した。その時点から浄土寺の西大寺末寺関係が生じるが、嘉元四年（一三〇六）九月二十九日には西大寺長老第二世の信空^⑩が尾道浦に到着し、十月八日には新たに建立された浄土寺金堂の落慶供養を信空が導師となつて行っており、十月十八日には定証起請文^⑪が記されている。なお、慈鎮和尚信空は文観房弘真の師であり、信空は六十余人を率いて浄土寺に赴いており、その中に弘真がいる可能性は否定できないと思われる。

さて、その浄土寺関係で同一の名前が確認されるのは以下の六人である。

40了胤 37善空 119観意 207信了 48道性 92空教
では、この一人一人について史料からおってみよう。

まず、40了胤についてだが、定証起請文の中にその名をみることができる。「定証起請文」からは定証が西国に赴いた経緯や浄土寺止住の理由、そして堂塔復興と信空下向についての詳細な内容が知られる。^⑬なお、起請文があらわされた三年前の乾元二年（一三〇三）には院憲によつて聖徳太子孝養像が造立されているが、これも定証に関係するものである。その定証起請文の奥書を見ると

嘉元四年^{歲次丙午}十月十八日 沙門定証起請

了胤 善空 永盛 了順

心法 頼宣 観意 唯心

円種 已上比丘衆

とあり、比丘衆^⑭の交名のなかに①40了胤、②37善空、③119観意の名を見ることができる。しかし、嘉元四年の時点では弘真は苾芻の地位であり、ここでの付法は想定しにくい。よつてこの後の付法と思われるが、いずれにせよ浄土寺比丘衆の中に付法者名が見られる点は留意しておきたい。

了胤は比丘衆の筆頭に名が挙げられているが、浄土寺に伝来する作例から了胤をみてみると、文保二年（一三二八）に益円によつて描かれた両界曼荼羅の描表装に記された結縁交名に名を連ねており、さらに元応元年（一三二〇）開

板の如意輪観音板木の開板者でもある。この如意輪観音の図様は横たえた独鈷杵の上に独鈷を配し、その上に蓮台が載せられ如意輪観音が坐す特異な形態で、密観宝珠舍利と称される形態に近いことが指摘されており、⁽¹⁶⁾しかも西大寺観尊に連なるものであるという。

一方、定証が復興した金堂などは正中二年（一三二五）に炎上し、灰燼に帰してしまった。しかし翌嘉暦元年（一三二六）には道蓮・道性夫妻の発願によって再建される。

浄土寺の勢力を窺い知ることができるが、復興によって完成した、同二年の多宝塔相輪内に納められた『法華経』八卷の第八卷奥書に⁽¹⁷⁾

願以書写此功力 四恩法界回向 一切□

父母親族兼詣慈尊三会、預不□

仏聞法目益、同証二転妙果、順経□

不殘導不退位、乃至法界□

嘉暦二年六月廿四日 頼□

定証 了胤 頼宣 唯心 証尊 □

顕寂 定如 了忍 信了 明 □

戒動 経善 常願 善願 円種 □

円信 已上先已分

とあり、これ以下、已上僧齋□（斎戒衆か）として三十人程の交名が記され、さらに尼僧や俗人の交名が続く。願文の筆頭は頼□なる者であるが、「先已分」として故人の名の筆頭に定証の名、そして了胤がみえる。定証が復興者とすれば、その次に名が記される了胤は浄土寺において重要な地位にいた存在と想像するのが自然である。また、ここで興味深いのは翌年に書写された『無量義経』の奥書で、⁽¹⁸⁾

嘉暦三年七月廿八日 □

右、志者、為了胤和尚□

法界平等利益也、

とあり、明確ではないが、了胤和尚の追善のために書写されたようである。嘉暦二年を遡ることほどない頃に了胤は没したのかもしれない。とすると、弘真からの付法もこれ以前となろう。

37 善空、119 観意については先に見たように嘉元四年の定証起請文の中で名が見いだせるだけである。

207 信了についても嘉暦元年の法華経奥書に「先已分」として名前がみられる。

48 道性は、浄土寺炎上後の復興発願夫妻の一人に同じ名がみられる。嘉暦二年の観音堂造立棟札⁽¹⁹⁾には

浄土寺観音堂上棟奉祝

聖朝安穩
信心願主

国土泰平
現当二世

仏法久住
皆令満足

諸寺繁昌
安穩快樂

造営功德 廣大無辺
六趣四世 同人充字

嘉暦二年卯丁四月十一日

大願主 沙弥道蓮
比丘尼道性

とある。道蓮の名前は見えないが、比丘尼道性⁽²⁰⁾が見られる。この道蓮と道性については同年の先の法華経卷八奥書に道俗交名の中に名前をみることもできる。

最後に92空教だが、文保二年(一一三二) 両界曼荼羅の内、金剛界曼荼羅の描表装天の部分に名前が見られるので、この時点から浄土寺住侶としていたものと思われるが、元弘三年(一一三三)の後醍醐天皇綸旨より大きな存在として登場してくる。四月九日、五月三日、十一月三十日、建武元年二月二十三日、同二年三月十五日の五通の綸旨が浄土寺に残されているが、元弘三年四月九日⁽²¹⁾をみてみると(図2)、

備後国浄土寺住侶等、致御祈祷之精誠、奉祈天長地久御願者、綸旨如此、悉之、

元弘三年四月九日 勘解由次官(花押)

浄土寺空教御房

というもので、浄土寺空教に対して、天長地久の祈祷を求めたものである。『武家年代記』によると、後醍醐天皇は

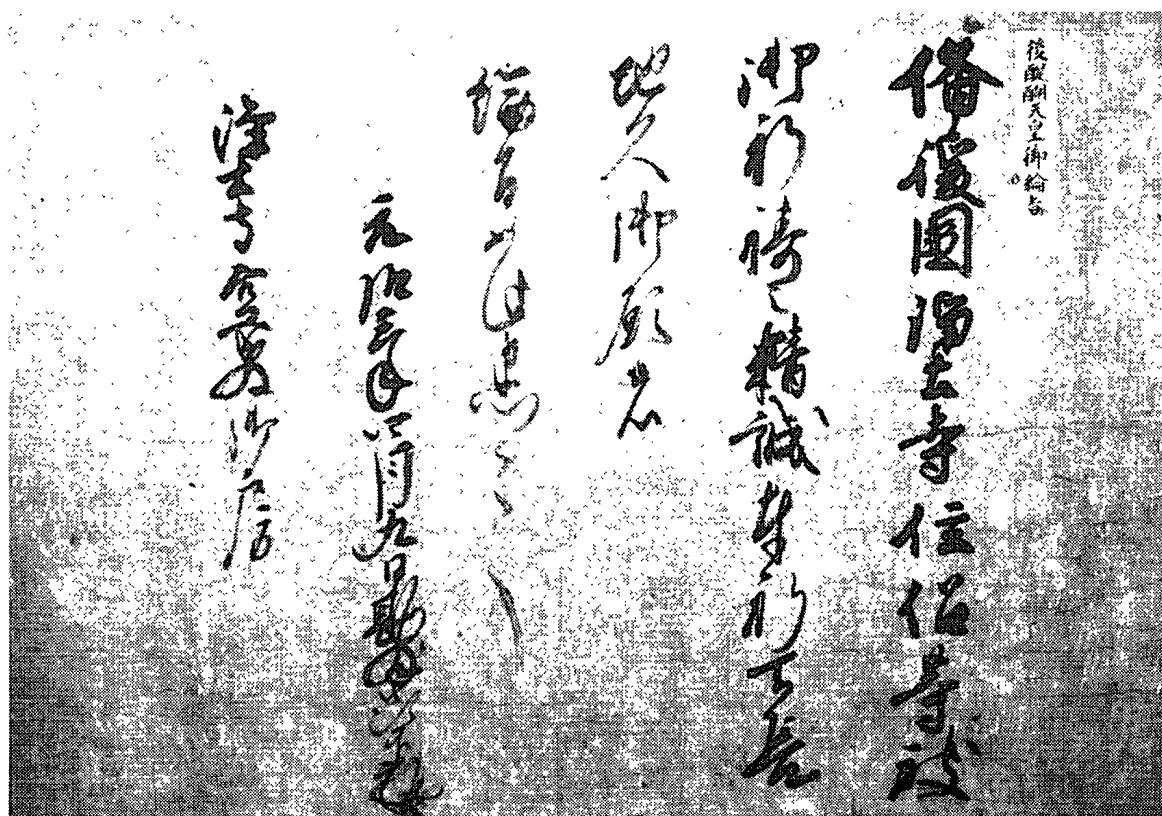


図2

前年の元弘二年三月七日に隠岐に流されたが、『増鏡』では翌年の閏二月二十四日に隠岐を出て伯耆に向かい、『太平記』二十八日には名和長年に迎えられ、船上山に拠点を置いたらしい。五月六日の足利尊氏六波羅攻略や五月二十一日の鎌倉幕府崩壊の後、後醍醐天皇は六月四日に京都還幸となるが、この空教に対する綸旨はまさに京都還幸までの時間に発せられたものである。次いで、五月三日の綸旨⁽²²⁾は

備州浄土寺々辺、可停止甲乙乙人之狼藉者、
綸旨如此、悉之

元弘三年五月三日 勘解由次官（花押）

空教御房

となっており、乱暴狼藉の停止となっている。これも京都還幸以前の時点だが、先の綸旨をみれば時々刻々と変化する後醍醐天皇の立場が窺える。そして十一月三十日の綸旨は因島地頭職を寄進する内容で、これも空教宛である。空教房心源は綸旨の宛名から想定すれば、元弘年の時点での浄土寺長老と考えて良からう。

定証の浄土寺止住以降、西大寺末寺として浄土寺はとらえられるが、定証の次に活躍したと想定される了胤、浄土

寺炎上後の復興願主の一人である道性、そして鎌倉幕府滅亡から後醍醐天皇の親政にいたる時期の空教がおり、十四世紀前半の浄土寺における有力かつ重要な人物が皆弘真の付法であったことは注目できよう。西大寺は第二長老信空、第三長老宣瑜、第四長老静然と続くが、西大寺末も真言付法の流れの中でとらえることのできる面もある。

では次に、まさに西大寺関係の弘真付法をみていきたい。

三 西大寺関係の弘真付法

西大寺関係では、まづ最初に叡尊十三回忌追善の為に造立された文殊菩薩騎獅像像内納入品の大般若経等の書写願主から見いだしてみたいと思う。正安四年（一三〇二）八月二十五日の叡尊忌日に開眼供養された文殊菩薩だが、その像内には舍利塔や種子曼荼羅、日課文殊図像をはじめ願文類や諸尊図像・陀羅尼など夥しい数の納入品がみられる。その中で經典類は、

（一）大般若経三二九卷、

（二）般若心経十一卷、

（三）法華経八卷、

(四) 金光明最勝王經十卷、

(五) 成唯識論十卷

の五種である。それを『鎌倉遺文』⁽²³⁾より抽出してみた。全体として書写した比丘などの住坊は西大寺、⁽²⁴⁾大安寺、東大寺戒壇院、唐招提寺、最福寺、法華尼寺など西大寺近隣の寺院が中心であるが、最福寺は『感身学正記』弘安四年(一二八一)四月十五日の条にみえる。また、大和国周辺の寺院では、河内・西琳寺、山城・白河慈光寺、東山速成就院、八幡大乘院などの僧も書写に加わっている。河内の西琳寺は『感身学正記』建長六年(一二五四)三月九日の条をはじめとして叡尊がしばしば授戒を行っている西大寺末寺である。八幡大乘院も弘安四年(一二八一)正月二十一日をはじめ授戒を行っている西大寺末であり、東山速成就院も弘安七年(一二八四)正月二十五日の条にみえるなど、西大寺末寺の比丘衆が書写に参加している。⁽²⁵⁾この中から奥書に注意してみると、大般若経と法華経などのなかに弘真の付法者名と同一の名を見いだすことができる。

大般若経

- ① 192 良尊 八卷 比丘良尊 東山速成就院
- ② 188 頼円 二二卷、 小比丘頼円 西大寺護国院東坊

③ 35 顯永 二六卷、 小比丘顯永 西大寺西室比房

④ 174 澄禪 六五卷、 沙弥澄禪 大安寺北僧房

⑤ 91 隆円 一五三卷、 小苾芻隆円 二十七歳

⑥ 183 乘意 一五四卷、 小比丘乘意 西大寺北僧坊

⑦ 166 円基 一六九卷、 菩薩戒比丘円基 二十八歳

⑧ 191 慶尊 二三七卷、 河州西林寺東僧坊常住坊

⑨ 73 明円 二四七卷、 西大寺宝塔院

⑩ 16 了賢 二七九卷、 沙弥了賢 西大寺石塔院

⑪ 104 長譽 卷未詳 形同沙弥長譽 白河慈光寺

⑫ 104 長譽 一卷、七卷 二十四歳、六歳

⑬ 50 性印 小苾芻 白河心光寺、光堂

⑭ 205 尊恵 小苾芻尊恵 西大寺護国院

⑮ 103 隆善 小苾芻 西大寺住

写経⁽²⁶⁾

以上、十四人（大般若經の⑪長譽と法華經の⑫長譽は同一）を見いだすことができる。ここでは弘真の付法リストで一〇〇番代以降の付法者、特に二〇〇番代前後も多い。

ここでの問題点はこの木造文殊菩薩騎獅像が開眼供養された正安四年の時点で、弘真も苾芻であって、殊音と名乗り大般若經の交点などをしている。納入經の書写僧も同様に「小比丘」「小苾芻」「沙弥」「形同沙弥」などと自称しており、いわば弘真にとっては同朋である者達である。概して、大般若經その他經典書写に携わった僧は生年二〇歳代、法年五、六歳が多い。したがって、正安四年の時点ではなく、後に階位等が上がってからの付法であると思われる。しかし、その西大寺の同胞達に後年に次々と付法していった点も注目しておきたい。

さて、大般若經書写者の中で、⑦73明円に注目すると、延元四年（一三三九）造立の奈良・金峯山寺藏木造金剛力士像の吽形像内背部墨書銘に⁽²⁷⁾大勸進として定善なるものの名が見え、その次に明円との名が見える。一方の延元三年（一二三八）の阿形像には像内背部墨書銘に「学頭権僧都法眼和尚位宗遍御衣木加持」と69宗遍との名が見える。宗遍は大般若經書写者にはその名は見えないが、弘真の付法

である。この二者が弘真の付法であるとする、阿形吽形像共に弘真の付法者が関与しており、一方は勸進として、もう一方は学頭として造像したものであることがわかる。

周知のように、後醍醐天皇は建武三年（一三三六）十二月、吉野に遷行して皇位を主張し、南朝が成立する。金峯山寺は地理的にも当然南朝側寺院であるが、延元三、四年はこの南朝盛んな時期であり、延元四年一月二十五日には弘真は再び醍醐寺座主となっている。その点からも仁王像に弘真付法の名がみられることは当然であろう。なお、仁王像に関しては康俊の造像の可能性も指摘されている。⁽²⁸⁾

次いで、大般若經六十五卷書写の⑤長譽だが、⑬長譽は法華經八巻を単独で書写している。法華經の奥書は正安三年（一三〇一）七月二日を最初として、同五年（一二〇三）六月十七日までに及ぶ。年齢も二十四歳から二十六歳の三年間に渡る。法華經八巻の書写をこれほどの長期間をかける意図は不明である。文殊菩薩像開眼が終了後の書写もあるようだが、巻八の奥書によると、現世の悲母尼阿弥陀仏の安穩と後生の菩提を法華經書写の功德により供養するものである。

次いで、『西大寺光明真言過去帳』⁽²⁹⁾巻第一、比丘衆・衆

首分の中で、付法者と同名であるものを第二長老信空から第十八長老深泉までよりみいだしてみると、

第二長老信空 14「道禪房 大乘院」41「尊忍房 宝

泉寺」 二人

第四長老静然 180「円証房 月輪寺」「円証房 遍照

寺」「円証房 報恩寺」(円証房が三人)

51「妙円房 安楽寺」115「妙観房 安

楽寺」 三人

第五長老賢善 92「空教房 浄土寺」(前述の空教)

131「顕性房 浄住寺」 二人

第六長老澄心 185「行智房 宝蓮院」119「観意房 福

田院」164「円道房 西光寺」140「覚心

房 清源寺」16「了賢房 七仏薬師院」

五人

第七長老信昭 84「善性房 当寺住(西大寺)」175

「深智房 西光寺」 二人

第八長老元耀 129「信証房 大乘寺」86「観一房 神

宮寺」 二人

第十長老清算 127「正信房 大興善寺」 一人

第十一長老覚乗 178「信覚房 報恩寺」 一人

第十三長老信専 128「妙心房 東妙寺」125「良瑜房 金

剛寺」 二人

第十四長老堯基 140「覚心房 宝光寺」 一人

第十五長老興泉 123「良空房 西琳寺」133「聖禪房 妙

覚寺」169「円智房 興法院」 三人

第十六長老禅誉 83「浄本房 安養寺」 一人

第十七長老慈朝 90「円忍房 速成就院」180「円証房

常福寺」 二人

第十八長老深泉 55「聖運房 菩提寺」 一人

と同じ仮名でいずれの僧か比定できない者もいるが、総じて二十七人を数え、西大寺歴代の各長老にまんべんなく弘真の付法者がいるようである。

この中の83浄本は叡尊三十三回忌追善供養に造立された西大寺蔵木造弥勒菩薩坐像(図3)の背面に墨書された造立願文に⁽³⁰⁾

帰命頂礼弥勒仏。哀愍納受此菩提。為我現身説妙法。速令成就菩薩行。願我生々離惡趣。親近善天聞正法。如理思□除□念。如説修行□衆生。浄本(花押)

とある、願主・浄本その人だろうか。



図3

四 西大寺流及びその他律僧関係の弘真付法

では、次に西大寺流の造像と思われる作例の銘記に弘真の付法と判じられる作例をみてみよう。九州には西大寺流の造像は多く、八尋和泉氏によってまとめられている⁽³¹⁾。

福岡・飯盛文殊堂文殊菩薩騎獅像は文殊像は文殊像内の墨書銘によると、元弘三年（一一三三）九月二十日に造られはじめ、暦応三年（一一三四）八月七日から塗られている。

るが、そこには「了融観一上人之時塗之」とあり、86観一の名が見える。これも弘真の付法のなかに名前がある。

さらに文殊像心木墨書には「康永元年^{中壬}自六月八日至七月

廿五日奉綵色絵師⁽³²⁾」とあり、康永元年（一一三二）の六

月八日から彩色が施され、「同七月九日^{当寺開山十三廻追〇也}開眼供養

^{平座曼陀羅供}導師博多大乗寺長老暁海信証上人」とあり、博多・大

乗寺の長老暁海信証上人が開眼導師となっているが、博多

大乗寺は西大寺末寺であり、さらにその開眼導師である長

老・129信証も弘真の付法に名を連ねているのである。観一

と信証については先の『西大寺光明真言過去帳』巻第一、

比丘衆・衆首分の第八長老元耀にも「観一房 神宮寺」、

「信証房 大乘寺」とその名がみえる。

同じく福岡・大興善寺の木造如意輪観音菩薩坐像はやはり暦応三年（一一三四）の造立であるが、像内背部墨書に「大願主当寺長老玄海大徳」とあり、大願主である186玄海も弘真付法の中に名がみえる。大興善寺も十四世紀には西大寺末寺である。その他、大興善寺については『西大寺光明真言過去帳』巻第一、比丘衆・衆首分の第十長老清算に127「正信房 大興禪寺」と弘真の付法者と同一の名がみえる。如意輪観音菩薩は弘真筆の画像が尾道・浄土寺に伝来

していることも看過できない。⁽³³⁾これら西大寺末も律僧であると同時に、西大寺密教の付法でもある。

次にみるのは元興寺藏弘法大師像で、像内納入品に朱印愛染明王印仏があることで名高いが、朱書墨書妙法蓮華經八卷や觀普賢經など經典類六種納入されていた。その無量義經の奥書に⁽³⁴⁾

于時正中二年五月十九日於南都般若寺「松林院之庵書寫了 執筆僧証惠敬白」過現未來一切衆生名

とあり、正中二年（一三二五）の書写年と執筆僧証惠¹⁵²の名が解るが、弘真の付法である。般若寺ではこの前年の元亨四年（一三二四）には文觀房弘真を願主、伊賀兼光を檀越として、木造八字文殊菩薩騎獅像が造立されており、それが金輪聖王御願の為に造立されたものとして注目されているが、その翌年書写であることも弘真の付法と考えてよからう。

次いで、可能性があるものとして、現高輪美術館藏大黒天をあげてみたい。旧東大寺油倉に安置されていた像で、⁽³⁵⁾厨子に納められている。その厨子の内側墨書に

貞和二年閏九月廿七日夜大行事項玄重

於住坊<sup>陳和卿
旧居</sup>夢油倉坊主円道房知事僧

道俊房等諸僧群集客所或：

とあり、貞和二年（一三四六）九月二十七日の日付と油倉坊主として164円道房の名前がみえるが弘真の付法にも円道がいる。先の『西大寺光明真言過去帳』巻第一、比丘衆・衆首分の第六長老澄心に「円道房 西光寺」とみえるが、同一人物であろうか。

この時期に弘真の付法者の名前が見えることは不思議ではないが、従来ほとんど注目されていない。だからといって、弘真の直接的な影響を想定するものでもないが、西大寺流を考えるとときに、真言流派の一流としてとらえる場合には、西大寺叡尊が松橋流の僧であり、信空もその法脈であること考慮しても、弘真が道順から受けた報恩院流の流れも無視できない。

律宗には西大寺流の他に、唐招提寺流、戒壇院流、法隆寺北室流、泉涌寺流などがあるが、唐招提寺流から弘真の付法と同一名を若干みることができ。

148覚恵は『招提千歳伝記』⁽³⁶⁾巻上之三に「唐招提寺第二十九世（中興九世）禅戒覚恵和尚伝」がある。

和尚字禅戒。覚恵其諱也。未知何許人。又不知何氏。志懷恢厚。神恵奇拔。其歳従証 玄和尚受戸羅妙教。終登

通別戒位。博達大小毘尼訪問。…中略…元亨元年觀國師示寂。師統其席。丕奉祖風。盛唱毘尼

とあり、出自は不明であるが、元亨元年（一二三二）凝然示觀の後に唐招提寺の長老になったという。この中からは弘真に付法された文言はみえないが、時期的に覺恵が弘真の付法であつても不自然ではない。なお、覺恵は嘉暦元年（一二三二）の奥書がある『大雲經』を唐招提寺に施入している。⁽³⁷⁾ 奈良時代の写経で、どこからもたらされたか不明であるが、唐招提寺聖教の充実を図つたものであろう。

同じく『招提千歳伝記』巻中之二の中から弘真の付法と同一の名である³³「浄心律師」をみると、

律師浄心。諱名照慧。不聞何地人也。為覺行律師之徒。

解行俱高。声名顯著。其年依久米田寺盛譽律師精究持犯。

未幾營入寂。師繼其席。後住戒壇院。丕唱華嚴戒律二教。

兼弘密乘。又住馬山竹林律寺云。応安四年十一月二日寂

於八幡之善法律寺。年齒未考也。

とあつて、³³浄心についても出自は不明である。『律苑僧

宝伝』⁽³⁸⁾巻第十四にも「浄心慧律師伝」があり、そこには

律師諱照慧。字浄心。師事覺行律師。有敏才。学通經律：

となつており、字が浄心であることが解る。『招提千歳伝

記』巻中之二の中からはもう一人弘真の付法である¹⁶⁷「室生寺真海律師」がいる。

律師真海。不知何地人。出空智律師之門。性敏修道。建武元年八月六日住持室生寺。於此名風卓然振縑素間。師以毘尼真言兩旨照導四衆。其終未聞也。

とあり、やはり¹⁶⁷真海も出自不明であるという。しかも没年も不明である。弘真の付法者は出自不明者が多いのか、もしくは何時の時点からか不明とせざるを得なくなつたのかもしれない。この真海については石川・本谷家に伝来する木造釈迦三尊像の岩座背面墨書に⁽³⁹⁾

開眼導師室生寺第二之長老真海 春秋七十八

と開眼導師として名前がみえる。

次に『律苑僧宝伝』巻第十四にみえる「堯戒如空二律師伝」をみると

堯戒律師。諱定泉。西大寺慈真和尚之門人也。

とあり、⁵⁴定泉も弘真と同じく慈真和尚信空に師事した律僧であり、これも弘真の付法である。

西大寺出身の律僧である弘真の付法に律僧がいることは自然であるが、特に唐招提寺の覺恵は元徳二年（一二三〇）に覺盛が大悲菩薩の諡号を後醍醐天皇より賜つた時の長老

である。嘉暦三年（一三二八）に忍性が菩薩号を後醍醐天皇より贈られ、翌年には西大寺第二長老信空が慈真和尚号を贈られ、更に翌年、覚盛の大悲菩薩号と律僧への連続した謚号に弘真関与の可能性を指摘したことがあるが、弘真付法の覚恵が唐招提寺長老であればなおさらであろう。

五 醍醐寺関係の弘真付法

醍醐寺関係であると、付法者の順の比較的早い番号にみられる。正和五年に報恩院流道順より付法を受けた弘真だが、道順の付法者の中に弘真より重受したものがみうけられる。『醍醐寺新要録』⁽⁴¹⁾ 卷第十二に道順の付法がみられる。

大阿闍梨西南院大僧正道順

応長元年十月十五日 受一憲什律師 印可、道場報恩院

同十二月廿三日 受一隆譽アサリ、同、職衆十二口

同月廿五日 受者等空上人・良祐上人同壇、道

場同、八口

正和四年八月廿六日 受一祇円上人 印可、同

正和五年四月廿一日 受一珠音上人（西大寺僧／竹林寺

長老）、同、八口

元亨元年四月五日 受一 道祐法眼 印可、同、

同月七日、 受一 憲家僧都、同、六口

同七月廿二日、 受一 道世アサリ、同、八口

と、憲什にはじまり、道世までの八人の付法が知られる。

その中、正和五年四月二十一日に弘真（珠音）の名がみえるが、4 憲什、43 隆譽、6 憲家、24 道世と弘真付法名にみえる。これからみると、弘真より以前に道順から付法されている、いわば兄弟子も弘真の付法となる。

憲什、憲家、道世については文保三年（一三一九）の

「真言院後七日御修法請僧等事」⁽⁴²⁾（東寺百合文書ろ）に

文保三年真言院真言院後七日御修法請僧等事

阿闍梨僧正法印大和尚位道順 胎藏界

頼験法印 増益護摩 静演権少僧都 聖天供

憲什権少僧都 五大尊供 憲家権少僧都 息災護摩

道祐法眼 頼胤権律師 十二天供

頼斎阿闍梨 文海阿闍梨

忠禅阿闍梨 尊範阿闍梨

忠嚴阿闍梨 道世阿闍梨 舍利供

信増大法師 …（以下略）

とあり、道順が大阿闍梨となった勤仕のもとで、道順の付

法である憲什、憲家、道祐、道世が後七日御修法の請僧として名がみえる。この中の25忠禪は弘真の付法者に名が見える。

なお憲什は元応元年（一二三九）に院流他十数人の院派仏師によって造立された法金剛院藏木造十一面観音菩薩坐像⁽⁴³⁾の像内納入品に十一面観音真言⁽⁴⁴⁾があり、

唵路計入爆羅訖里娑婆賀」法印大和尚位権大僧都憲什

とある。法金剛院は唐招提寺の律僧導御によって復興された寺院であり、十一面観音像は応長元年（一二三一）九月二十九日に寂した導御に対する三回忌の発願によって正和二年（一二三三）より造像の端緒がみられるもので、同じく納入品の「十一面観音摺仏（紙背結縁交名）」には泉涌寺俊苒や西大寺叡尊、唐招提寺覚盛、東大寺戒壇院凝然ら⁽⁴⁵⁾律匠の交名があるらしく、さらに「十一面観世音菩薩結縁衆交名帳」にも西大寺の忍性や信空、唐招提寺の証玄ら律僧の名が多くみられる。その同種納入品の中に憲什の名が見えることは、弘真から付法を受けた律僧として憲什をとらえるべきであろう。

後七日御修法の請僧では67深誉が嘉暦二年（一二三七）、13成助が嘉暦四年（一二三九）、43隆賢が正中二年（一二三

二五）、元弘二年（一二三二）、正慶二年（一二三三）に名が見えるほか、30了円が文保二年（一二三八）の請僧交名に名がみえるが、この年には弘真の名も「弘真阿闍梨」として見えている。

その後、弘真が東寺長者となり、真言院後七日御修法に大阿闍梨として勤仕したことは二度ある。建武三年（一二三六）と再び東寺長者となった正平七年（一二五二）であるが、建武三年を東寺百合文書ろからみると、

建武三年真言院真言院後七日御修法請僧等事

阿闍梨法務大僧正法印大和尚位弘真 金剛界

憲什法印権大僧都 息災護摩 隆誉法印権大僧都 増益護摩

源全権少僧都 聖天供 賢忠権少僧都 五大尊供

定愉権律師 性源権律師 諸神供

忠禪阿闍梨 聖誉阿闍梨

教潤阿闍梨 頼甚阿闍梨

道誉阿闍梨 舍利供 …（以下略）

であり、4 憲什、11 隆誉、43 隆賢、25 忠禪と自らの付法者を請僧としている。先に見た文保三年の道順が大阿闍梨の場合も自らの付法者を請僧に多く加えているように、大阿闍梨と請僧の関係があるように思える。一方、弘真の正平

七年の後七日御修法請僧に付法者の名はみえない。これは大阿闍梨として勤仕しても、建武三年の時点と正平七年での立場の相違を如実に示すものであるうか。いずれにせよ、道順と重受である。

重受という点からいうと、報恩院流寛助の付法で、日野俊光の息であり、足利尊氏の帰依を受けた⁽⁴⁶⁾8賢俊も

醍醐座主

第六十三権僧正道祐道順大僧正入室付属資弘真僧正重受、内大臣通重息、東寺長者

第六十四僧正弘真道順大僧正入室資、一階僧正、之号後小野僧正

第六十五法印権大僧都賢俊寛助大僧正入室資、弘真僧正重受、日野大納言俊光卿息

となっており、弘真のあと六十五代醍醐寺座主となったが、「弘真僧正重受」とあるように、弘真からも付法を受けている。弘真の次に醍醐寺座主となり、あたかも反逆者から座主を奪還した僧のように評価される賢俊であるが、⁽⁴⁷⁾弘真から付法を受けているとなると、付法順序にて座主となったようにもみえる。

賢俊は『野澤血脈集』巻第二の報恩院流によると

憲深―定済―定勝―定任―賢助―賢俊

と賢助の付法であり、同じく『野澤血脈集』巻第二の宝池院流によっても

定済―定勝―定任―賢助―賢俊

と賢助に次いでおり、同じ法脈の中で記されている。

東寺の僧と思われる者は、15潤恵で、『東寺塔供養記』⁽⁴⁹⁾に宿坊事。示遣教嚴法印之處。潤恵法印進請文云。諸坊為公卿殿上人宿所可被懸之由事。則以此御教書。悉相触候了。札事同令存知候。寛雄参上。毎事可被仰下候。恐々謹言。九月十七日 潤恵

とある。また、30了円については文保二年の後七日御修法に名があつたが、「金剛寺僧連署状」にも了円と名がみえる。同一人物か判断しかねるが、文観房弘真の關係から考えて、金剛寺の僧の中に付法者がいることは自然である。金剛寺には43隆賢や72道暁らの名前もみることができ。

さて、道順から元亨元年（一二三二）に付法を受けた道祐である。道祐は『醍醐寺新要録』巻第十四、座主次第篇によると

第六十三権僧正道祐内大臣通重公息、道順大僧正入室付属資、弘真僧正重受

元弘三年 月 日宣下、年 月 日去職、寺務、建武三年冬捨門跡所職等、参住芳野之行宮、聖主崩御之後、隱遁了、

とあり、報恩院の道順の付法であつたが、弘真にも重受し

ており、また、建武三年の冬には芳野（吉野）に移り住み、聖主（後醍醐天皇）没後は隠遁したという。⁽⁵⁰⁾ 建武三年（一三三六）の十二月に後醍醐天皇は吉野にて南朝を設立しているの、まさにその時に従った僧であろう。道祐は醍醐寺座主第六十二代が賢助であり、弘真が六十四代の間にして重要な僧であると思われるが、その資料に乏しい。弘真からの重受については同じく『醍醐寺新要録』巻第十四の座主并法流血脈でも

第五十七、衆徒違背 第六十四

第六十三

道淳（朱字）

弘真（朱字）

道祐（朱字）

報恩院大僧正

号文観上人

報恩院僧正

と記され、弘真の付法であることは確かである。しかし、付法者の中に道祐の名がみえないが、報恩院流の正嫡としての付法を考えると、この付法者名に道祐が記載されていなければならぬ。とすれば、2 最初伝僧正道が道祐ではなからうか。最初伝僧正との意が判じ難いが、「道」との文字と二番目という付法順の重要性から鑑みれば、最初伝僧正が道祐と考えてよからう。

2 道祐の次に記される、3 の二品親王は益性と判じられる。益性は『続史愚抄』⁽⁵¹⁾に

「上乘院某^{益性、龜山院皇子}とあり、二品で下河原と号したことがわかる。⁽⁵²⁾」

弘真は延文三年（正平十二年・一三五七）河内長野金剛寺にて没するが、「金剛寺史料 奥書」⁽⁵³⁾『河内長野市史』史料編二（正平十二年（一三五七）に弘真の葬送についての文言がある。

同九日戌剋初点、小野僧正弘一、於当寺大門往生院、入滅畢 行年八十」写瓶御弟子下河原宮

本云、此僧正、先帝当今二大御国師、故御自当帝為御許被令写瓶了、故中陰葬礼御沙汰、偏公方御計也、予為門弟随一、故記之、学頭法印大和尚位禅意 七十四

と、金剛寺禅意の奥書であるが、ここに「写瓶弟子下河原宮」とみえるように、⁽⁵⁴⁾ 真の付法である。二品で付法という点から、また、龜山院の皇子という点からも3 二品親王は益性であろう。⁽⁵⁵⁾ その益性に関しては、「益性法親王書状」が金澤文庫に保管されているが、⁽⁵⁶⁾ その中に、弘真の付法である⁽⁵⁷⁾ 良然の名がみえることも留意しておきたい。

弘真の醍醐寺における付法は報恩院流を中心としているが、金剛王院流の⁽⁵⁷⁾ 実助や19 顕恵などもおり、宝池院流も含まれている。遍智院と称された21 無品親王聖尊もいる。

また、仁和寺の13成助など付法におり、野沢諸流に及ぶ。

『瑜伽伝灯鈔』⁽⁵⁸⁾によると、弘真は元亨三年（一三二三）勅により参内し、正中二年（一三三二）十月、後醍醐天皇に印可と仁王経秘法を授け、内供奉に任ぜられている。さらに、元徳二年（一三三〇）十月二十六日には後醍醐天皇に瑜祇灌頂を授けた。翌三年五月五日には鎌倉幕府呪詛により逮捕され、硫黄島に流されるが、元弘三年（一三三三）五月二十七日に帰洛、建武元年には醍醐寺第六十四代座主、翌二年に東寺一長者にもなる。後醍醐天皇に重用されたことをふまえれば、報恩院流のみならず諸流への多岐にわたる付法もあり得ると思われる。

おわりに

以上、雑駁ではあるが、弘真の付法について諸資料から判じ得る限りで付法者名を考えてみた。出自としての律僧、そして、道順より付法を受けた後の醍醐寺報恩院流の真言阿闍梨としての立場もある。もとより西大寺叡尊は醍醐松橋流の法脈であり、永仁三年（一二九五）には信空より両部灌頂を受けている。

また、依然として不明の付法者名も多く、今後も諸資料から同一の名を見いださねばならない。本稿ではあまり取り上げることではできなかったが、武州・称名寺関係の文書（金沢文庫文書）にも同一名がしばしば見られることも留意される。例えば、「八幡結縁灌頂僧交名」⁽⁵⁹⁾は顕誉を筆頭に醍醐寺の多くの僧名が列挙されるが、その中に17俊性の名がみられる。周知のように称名寺には醍醐寺関係の事相がみれる一方で、戒律関係も多い。

全く不明である点として、付法の時期や場所などの確定がある。時期的な問題としては、

- 一 信空より両部灌頂を受けた正安三年（一三〇一）から道順より伝法灌頂を受けた正和五年（一二一六）まで。

- 二 道順に伝法灌頂を受けてから、後醍醐天皇が吉野に南朝を成立する建武三年十二月まで。

- 三 それ以降の吉野現光寺や浄瑠璃寺、金剛寺に没するまで。

この三期をどうとらえるのか大きな問題である。しかし、付法者ことごとく史料に乏しいきらいがある。唐招提寺の148覚恵のように『招提千歳伝記』に記載があっても、出自

不明とされるのが好例である。今後一人でも多く判明することを願う、大方の御教示を切に乞う次第である。

(未完)

注

- (1) 拙稿「文観房弘真に関係する絵画二題―白鶴美術館蔵五字文殊画像と尾道浄土寺蔵如意輪観音菩薩画像―」(『南都佛教』第七十八号、二〇〇〇年二月)
- (2) 近年の文観房弘真研究として井野上真弓「中世王権と立川流―文観の名称をめぐって―」(『文明研究』第十八号、二〇〇〇年三月)がある。
- (3) 拙稿「愛染明王画像二題―根津美術館蔵本とMOA美術館蔵本―」(『佛教藝術』二六八号、二〇〇三年五月)ここで、文観房弘真関与の可能性がある画像として根津美術館蔵本とMOA美術館蔵本をとらえてみた。
- (4) 辻村泰善「『瑜伽伝灯鈔』にみる文観伝」(『元興寺文化財研究』No.69、一九九九年六月)
この中で辻村氏は『瑜伽伝灯鈔』を読み下し文にされている。また、立川流の汚名を着せられたことに対しての再考を促している。参照されたい。
- (5) 大谷大学図書館蔵本十卷五冊(架番号長保二三八)、の中、

第九卷に「真言秘密相承事」として第一高祖法身大日如来からはじまる血脈が記され、第二十九に「法務大僧正弘真」の事跡が記されている。卷十の奥書は

已上伝法灌頂授与之作法」奉為門主小野宮益仁記之于時正平廿年(歳次「乙巳」)於摂州住吉莊嚴浄土寺門主以此記ヲ毎年為」御指南被行之畢即為門跡末葉一被写留畢最輪院僧正教賢被感称義之者也」金剛資宝蓮在御判

とあり、宝蓮の書写である。それによると、これらの伝法灌頂の作法は小野宮益仁のために記したもので、正平二十年(一三六五)に摂津の住吉莊嚴浄土寺にて毎年の指南の書としていたものらしい。なお、住吉の莊嚴浄土寺は明徳二年(一三九一)の『西大寺末寺帳』にあり、西大寺末であることが解る。

- (6) 筆者は前掲注1の論考にて付法二〇六人としたが、ここで二〇七人に訂正する次第である。

- (7) 『真言宗全書』第三十九卷

- (8) 築島裕「醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』」(醍醐寺文化財研究所『研究紀要』第一号、一九七八年十一月)

- (9) 守山聖真氏は『立川邪教とその社会的背景』(国書刊行会、一九九〇年九月)「第十一章正付法下河原宮益性親王」の中で、弘真の付法を道祐、文海、太夫房律師、禅恵、下河原宮、宝蓮の六人としている。この中、文海と太夫房律師、禅恵の三人については付法者と名が一致しない。しかし、太夫阿闍梨信慶や

宝池院、後三宝院など今回明らかにしえなかった者に相当するかもしれない。

- (10) 西大寺第二長老信空については、追塩千尋「叡尊歿後の西大寺―二代長老信空とその周辺をめぐって―」(速水侑編『院政期の仏教』所収、吉川弘文館、一九九八年二月)が詳しい。

- (11) 『鎌倉遺文』第三十卷、No.二二七四七

- (12) 河合正治「西大寺律宗の伝播」(『金澤文庫研究』一四八号、一九六八年七月)

- (13) 定証起請文については、中尾堯「備州における勧進聖の系譜」(『瀬戸内海地域の宗教と文化』所収、雄山閣出版、一九七六年二月)参照。

- (14) 松井輝昭「尾道浄土寺の寺院組織―鎌倉末・南北朝期を中心に―」(『瀬戸内海地域史研究』第二輯、一九八九年十月)松井氏は浄土寺の鎌倉末期における寺院組織として長老・知事・綱維・沙弥知事の四役職があったことを指摘している。

- (15) 中島博「修理報告 絹本著色両界曼荼羅図」(京都国立博物館『学叢』第七号、一九八五年三月)

- (16) 内藤榮「密観宝珠舍利容器について」(奈良国立博物館研究紀要『鹿園雑集』創刊号、一九九九年三月)

- (17) 『鎌倉遺文』第三十八卷、No.二九八七二

- (18) 『鎌倉遺文』第三十九卷、No.三〇三二五

- (19) 『鎌倉遺文』第三十八卷、No.二九八〇七

- (20) 道性は金澤貞顕書状(高野山文書宝簡集二十四、『鎌倉遺文』卷三十八、No.二九五一一)にも名が見え、称名寺の僧と思われる人物がいる。弘真の付法が浄土寺の道性か称名寺の道性か判別できないが、本稿では浄土寺の尼僧として考えておく。また、弘真の付法の中に、尼僧がどの程度いるのかは今後の課題でもある。

- (21) 『鎌倉遺文』第四十一卷、No.三二〇八三

- (22) 『鎌倉遺文』第四十一卷、No.三二一一三〇

- (23) 『鎌倉遺文』第二十七卷、二十八卷

- (24) 西大寺では「四室」「大慈院」「護国院」「西室」「宝塔院」「石塔院」などが比丘衆の住坊となっていたらしい。

- (25) その他、「伊賀国阿彌た寺」「河州東条郡虚空蔵寺」「観音寺」「伊州大聖寺」などの比丘が『大般若経』書写に加わっている。伊賀・阿弥陀寺、大聖寺は西大寺末寺である。「観音寺」についてだが、末寺には大和国宇野、山城国相楽郡、山城国木幡、摂津国兵庫八王子、阿波国、豊前国城ミヤコ、豊前、肥後河尻の八ヶ寺あり、いずれの観音寺か確定できないが、書写僧の多くが近隣中心の寺院在住であることを考慮すれば、大和国か山城国の観音寺であると思われる。

- (26) 『鎌倉遺文』で「写経」となっており、經典名不明のためそのままとした。

- (27) 久野健編『造像銘記集成』(東京堂出版、一九八五年十月)

- (28) 奈良国立博物館編『室町時代仏像彫刻 在銘作品による』
(一九七二年二月)
- (29) 奈良国立文化財研究所『西大寺関係史料(二)―諸縁起・衆首交名・末寺帳―』(一九六八年三月)
- (30) 長谷川誠「西大寺本堂弥勒菩薩坐像―叡尊三十三回忌追善像―」(『大和文化研究』九ノ四、一九六四年四月)
- (31) 八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」(『佛教藝術』一九九号、特集叡尊と西大寺派美術、一九九一年十一月) また、田辺三郎助「大分・金剛宝戒寺大日如来像と仏師康俊」(『佛教藝術』一九九号、特集叡尊と西大寺派美術、一九九一年十一月)
- (32) 拙稿「西大寺叡尊及び西大寺流の文殊信仰とその造像」(『美術史研究』第二十六冊、一九八八年十二月) ここで、筆者は文殊菩薩の縁日二十五日について言及したことがあり、縁日を選ぶ意でも西大寺流の作例であると考えた。
- (33) 拙稿前掲注1
- (34) 『大和古寺大観』第三卷、元興寺、元興寺極楽坊、大安寺、般若寺、十輪院、「弘法大師像解説」(岩波書店、一九七七年六月)
- (35) 清水真澄「旧東大寺油倉の大黒天像」(『佛教藝術』一五七号、一九八四年十一月、後に同氏著『中世彫刻史の研究』所収、有隣堂、一九八八年三月)
- (36) 『大日本仏教全書』戒律編
- (37) 唐招提寺蔵『大雲經』『請雨經』第六十四の奥書は次の通り
奉安置 唐招提寺御経蔵」右為生々世々勤求仏性堅持浄戒利益衆生也」嘉暦元年十一月晦日沙門覚恵
- (38) 『大日本仏教全書』卷一〇五
- (39) 久野健編『造像銘記集成』(東京堂出版、一九八五年十月)
- (40) 拙稿前掲注1
- (41) 『醍醐寺新要録』(法蔵館、一九九一年十月)
- (42) 『大日本古文書』東寺文書
- (43) 木造十一面観音菩薩坐像については、長谷川誠「十一面観音像」(『国家』九四一号、特輯 法金剛院の美術、一九七一年十二月) に詳しい。また、清水真澄「仏師院広とその作例」(『国華』九七三号、一九七四年九月、後に「仏師院吉、院広の事蹟とその作例―十四世紀における院派仏師の動向をめぐって―」と改題して、同氏『中世彫刻史の研究』所収、有隣堂、一九八八年三月) 参照。
- (44) 『鎌倉遺文』第三十五卷、No二七〇五四
- (45) 前掲長谷川論文注43
- (46) 『大日本史料』六編之二十一、正平十二年十月九日、なお賢俊については森茂暁「三宝院賢俊について」(九州大学国史学研究所編『古代中世史論集』吉川弘文館、一九九〇年八月) 参照。
- (47) 例えば、『密教大辞典』(法蔵館、一九三一年九月) では「時の文観は後醍醐天皇の知遇を忝うし、醍醐寺座主及び東寺長者

を兼摂して権勢を恣にせしが、賢俊は足利尊氏の助力を受けて文観を逐ひ、…」として、あたかも賢俊が意図的に弘真を座主から引きずりおろしたような記述である。

- (48) 賢俊については守山聖真氏も醍醐寺座主次第に重受とあるが疑問であるとしている。前掲注9同氏『立川邪教とその社会的背景』参照。しかしそれは賢俊が足利尊氏に帰依を受けた点と南北朝成立後の北朝と南朝との立場を念頭におくからであり、建武年間以前の弘真の地位を考慮すれば、賢俊への付法もありえるのではなからうか。

(49) 『群書類従』

- (50) 伊東清郎氏は道祐に対して「後醍醐天皇にぴったり寄り添う密教僧」としている。(同氏「中世醍醐寺と公家・武家―祈祷と政治―」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年八月)

(51) 新訂増補『国史大系』

- (52) 櫛田良洪「邪教思想の展開」(同氏『真言密教成立過程の研究』所収、山喜房仏書林、一九六四年八月)

(53) 『河内長野市史』史料編二(二〇〇一年三月)

- (54) 櫛田良洪氏によると、益性は鎌倉笹目におり、称名寺剱阿に付法している。前掲注52櫛田著書参照。また、この間の事情については、納富常天『金沢文庫資料の研究』(法蔵館、一九八二年六月)参照。

- (55) 弘真の葬送については宮崎栄雅「小野文観僧正に就いて」(『密教論叢』六、一九三五年七月)も金剛寺史料を用いて言及している。

(56) 『鎌倉遺文』第三十七卷、No.二八七九一

- (57) 伊東清郎氏によると、金剛王院流も鎌倉末期には親後醍醐天皇派となったという。(同氏「中世醍醐寺と公家・武家―祈祷と政治―」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年八月)

(58) 拙稿注1参照

(59) 『鎌倉遺文』第三十五卷、No.二七三六四

〔付記〕

作品の調査及び図版掲載については、浄土寺小林暢善氏、西大寺に御協力を得た。ここに記して御礼申し上げます。